

和 手 遺 跡

——塩尻市市道和手北線道路新設改良工事
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——

1988

塩尻市教育委員会

和手遺跡

——塩尻市市道和手北線道路新設改良工事
埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書——

1988

塩尻市教育委員会

序

和手遺跡は、塩尻市大字広丘高出地区の最南端にあり、ここから北へ続く田川左岸段丘の通称「高出遺跡群」の中の一遺跡として古くから知られておりました。昭和63年3月開通に向けて進められた、中央道長野線および国道20号塩尻バイパス等の建設をはじめとして、塩尻市では、道路交通網の整備が急速に進行しています。こうした中でこの度、国道20号塩尻バイパス建設に関連した市道整備の一環として市道和手北線の建設が行なわれることとなりました。これに伴い和手遺跡の一部が破壊されることになったため、工事施行に先立ち、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査が委託され、市教育委員会では、中島章二先生を団長とする遺跡発掘調査団に調査を再委託することとしました。

発掘調査は、昭和62年4月中旬から下旬にかけて行なされました。調査の結果、弥生時代から平安時代にかけての住居址、墓址と、これに伴なう多量の遺物等、予想以上の成果を得ることができ、遺跡の性格は勿論、塩尻市のこの時期における様相を捉えて行く上で貴重な資料を数多く提供することになりました。

終わりにあたり、本調査にご理解、ご協力を下さいました地元関係者、地主の方々、献身的に作業にご協力いただいた発掘調査参加者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和63年2月

塩尻市教育委員会
教育長 小 松 優 一

例　　言

1、本書は、塩尻市大字広丘高出地籍における、市道和手北線建設事業に伴う和手遺跡の発掘調査報告書である。

2、発掘調査は、和手遺跡発掘調査団（団長　中島章二氏）に委託し、現場での調査は昭和62年4月13日から同24日まで行なった。

3、遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和62年10月から昭和63年3月にかけて行なった。分担は次のとおりである。

遺構…整理、トレース；鳥羽。

遺物…実測、拓本、トレース；腰原、鳥羽。

図版組み…伊東、鳥羽、腰原。

写真…伊東、鳥羽。

4、本書の執筆は各調査員、調査補助員が分担して行なった。分担は次のとおりである。

第Ⅰ章……………伊東　直登

第Ⅱ章第1節……………鳥羽　嘉彦

　　第2節……………伊東　直登

第Ⅲ章……………伊東　直登

第Ⅳ章　遺構……………鳥羽　嘉彦

　　遺物……………腰原　典明

第Ⅴ章……………小林　康男

5、本書の編集は鳥羽・伊東が行なった。

6、本市道は国道20号塩尻バイパスへの取り付け道路にあたり、先に市道分の発掘調査が行なわれ、引き続きバイパス本線部の調査が実施された（発掘調査報告書は昭和63年3月同時刊行）。このためバイパス用地内から検出された住居址および方形周溝墓は、本調査の遺構と続き番号にしてある。また本書の平安時代土器に用いた時期区分はバイパス報告書に従っており、和手Ⅲ期は8世紀末～9世紀、和手Ⅳ期は10世紀に比定される。

7、本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序		
例 言		
第Ⅰ章	調査状況.....	1
第1節	調査に至る経過.....	1
第2節	調査体制.....	2
第3節	調査日誌.....	2
第4節	遺跡の状況と面積.....	3
第Ⅱ章	遺跡周辺の環境.....	4
第1節	自然環境.....	4
第2節	周辺遺跡.....	4
第Ⅲ章	遺跡の概要.....	7
第1節	遺跡の概要.....	7
第2節	発掘区の設定.....	9
第Ⅳ章	遺構・遺物.....	10
第1節	住居址.....	10
第2節	方形周溝墓.....	30
第3節	ピット・遺構外出土遺物.....	33
第Ⅴ章	まとめ.....	35

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和63年3月に塩尻市内を中央道長野線が開通するに伴い、市内道路網に係わる諸事業が、一般国道20号（塩尻バイパス）改築工事をはじめとして、県道、市道に至るまで行なわれた。国道19号線と20号線の分岐点である広丘高出地区では、中央道長野線の塩尻インターチェンジと国道の分岐点を結ぶ塩尻バイパスが開通することとなり、これに関連する市道整備が進められた。こうした中で、塩尻バイパスへの取り付け道路として、「市道和手北線道路新設改良工事」が具体化した。道路予定箇所は、「高出遺跡群」の一つである和手遺跡内に設定されていたため、事業主体である塩尻市と協議を重ね、工事施行前に緊急発掘調査を実施して記録保存をはかるとした。

昭和62年4月3日付、「道路新設改良工事に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託について」により塩尻市教育委員会は、和手遺跡発掘調査の委託を受けた。これにもとづき、4月7日付で塩尻市と委託契約を交わし、市教委はさらに、4月9日、塩尻市文化財調査委員長中島章二氏を団長とする和手遺跡発掘調査団に再委託をした。現場における発掘調査は、4月13日から4月24日にかけて行なわれた。

発掘調査計画書（一部のみ記載）

- 1 発掘調査地 塩尻市大字広丘高出
- 2 遺跡名 和手遺跡
- 3 遺跡の状況 地目（煙）
- 4 発掘調査の目的及び概要 開発事業市道和手北線新設改良工事に先立ち300m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。
遺跡における発掘作業は昭和62年4月30日までに終了する。
調査報告書は昭和63年3月25日までに刊行するものとする。
- 5 調査の作業日数 発掘作業10日 整理作業10日 合計20日
- 6 調査に要する費用 1,900,000円
- 7 調査報告書作製部数 300部

第2節 調査体制

団長	中島 章二（塩尻市文化財調査委員長）
担当者	鳥羽 嘉彦（長野県考古学会員、市教委）
調査員	小林 康男（日本考古学協会員、〃） 伊東 直登（長野県考古学会員、〃）
調査補助員	腰原 典明（信州大学学生）
参加者	青木雅俊、赤須陽子、赤津道子、池田貴江子、伊藤みつる、太田 和、小沢甲子郎、北沢喜子雄、小松重久、小松淳子、小松鈴子、小松三枝子、小松美津子、小松幸美、小松義丸、小松静子、小松礼子、清水年男、白木正富、高橋タケ子、高橋島億、高橋阿や子、手塚きくへ、寺沢俊子、中野やすみ、藤松謙一、古瓶馨子、保高愛子、松下おもと、山口仲司、山下 広、吉江みより、熊谷玄四郎、中村芳晴、樋口 彰、柳沢 一、
事務局	塩尻市教育委員会教育長 小松 優一 市教委総合文化センター所長 清水 良次 〃 文化教養担当課長 横山 哲宣 〃 文化教養担当副主幹 三澤 深 〃 平出遺跡考古博物館学芸員 小林 康男 〃 文化教養担当主事 鳥羽 嘉彦 〃 文化教養担当主事 伊東 直登

第3節 調査日誌

昭和62年4月13日（月）晴 バックフォーにより表土除去開始。土師、須恵器片等出土。

4月14日（水）快晴 本日から作業員参加による発掘調査開始。朝、結団式を行なう。中島調査団長、横山文化教養担当課長の挨拶後、助農により遺構検出作業開始。

4月16日（木）快晴 検出作業続行。住居址と思われる黒褐色土の落ち込み9ヶ所と、方形周溝基の周溝と思われる落ち込み2ヶ所を確認、掘り下げを開始する。グリッド設定。

4月17日（金）晴 1号住居址、東側道路巾杭までの拡張により全プラン検出。粘土カマド検出。2号住居址、セクション図化、平面図測図。3号住居址、道路幅杭までの拡張により北壁検出。4号住居址、鉄製紡錘車出土。

4月18日（土）晴 1号住居址、カマド右脇ピット内で焼土の堆積確認。4本主柱穴検出。4

号住居址、弥生磨製石器出土。6、7号住居址、共に東壁でカマド検出。1号方形周溝墓、西壁際で主体部の一部を検出。地主の好意により、道路用地外までの拡張を開始する。

4月19日(日) 定休日

4月20日(月) 晴 1号住居址、写真撮影。3号住居址、床面検出。4、5号住居址、床面精査。6、7号住居址、遺物取り上げ。1、2号方形周溝墓、検出作業。

4月21日(火) 晴 1号住居址、平面図測図。3号住居址、床面精査により、周溝、壁外柱穴確認。5号住居址、床面精査。西壁外のピット内から弥生時代の赤色高杯脚部出土。

4月22日(水) 晴 3～7号住居址、遺物取り上げ、平面図測図、写真撮影を終了する。8～11号住居址、床面精査、4軒の重複関係が判然としない。

4月23日(木) 晴 8～11号住居址、遺物取り上げ、平面図測図、写真撮影。1号方形周溝墓、主体部半截掘り下げ。覆土の土ふるいを併行する。

先土器時代調査のためトレンチを設定し、掘り下げを始める。

4月24日(金) 晴 1、2号方形周溝墓、掘り下げ終了。平面図測図、写真撮影。1号方形周溝墓の主体部覆土の土ふるい終了、遺物なし。トレンチ掘り下げ、遺物の出土なし。調査区全面清掃後、全体写真、全体図作成。本日にて、現場における全調査日程を終了する。

整理作業は、10～3月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
和手	塩尻市大字広丘高出	畠地	包蔵地	36,000m ²	600m ²	300m ²	470m ²	1,900,000円

第1表 発掘調査経過表

遺跡名	月	4	5～9	10	11	12	1	2	3	主な遺構	主な遺物
和手		発掘								弥生時代住居址 平安時代住居址 方形周溝墓	3 8 2 弥生時代土器 土師器 須恵器 灰陶器 鉄製防錆車

(事務局)

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

和手遺跡は塩尻市大字広丘高出地籍にあり、国道19号線と20号線の分岐点である高出交差点の東側に広く展開している。

この付近は塩尻市の中心である大門市街地を乗せる桔梗ヶ原台地（高位段丘面）の東側段丘線にあたり、塩尻峠に源を発する田川を臨んでいる。段丘は洪積世末期の隆起運動の際、西側の奈良井川側が東側の田川側に比して差別的に隆起している。このため奈良井川側には3段から4段の明瞭な河岸段丘が発達しているのに対し、田川側にはほとんど発達せず、未発達な段丘面を僅かに残しているにすぎない。

段丘上にはここから広丘野村の丘中学校付近にかけて南北2.5km、東西300mの広範囲にわたって高出遺跡群が分布しており、先土器時代から縄文、弥生、古墳、奈良、平安の各時代に及んでいる。今回の調査対象となった和手遺跡も上記の各時代を全て包括する複合遺跡であり、高出遺跡群の中でも最大級に属する遺跡である。

遺跡のある上位面は水田地帯となっている下位面と対照的に水利に著しく乏しいのが特徴で、強いて挙げれば平出の泉から流れ出てここで田川へ注ぐ渋川の小河川が唯一の水資源となる。従って上位面は「桔梗ヶ原葡萄」に代表されるように畑地利用にとどまっているのが現状である。古代においてはなおさら生活用水の確保として、段崖直下を流れる田川への依存度が強かったと推測され、水田耕作地も集落を離れ、より田川に近い段丘面で行なわれていた可能性が強い。

発掘調査区は現在、畑に利用されており、標高は700m前後である。

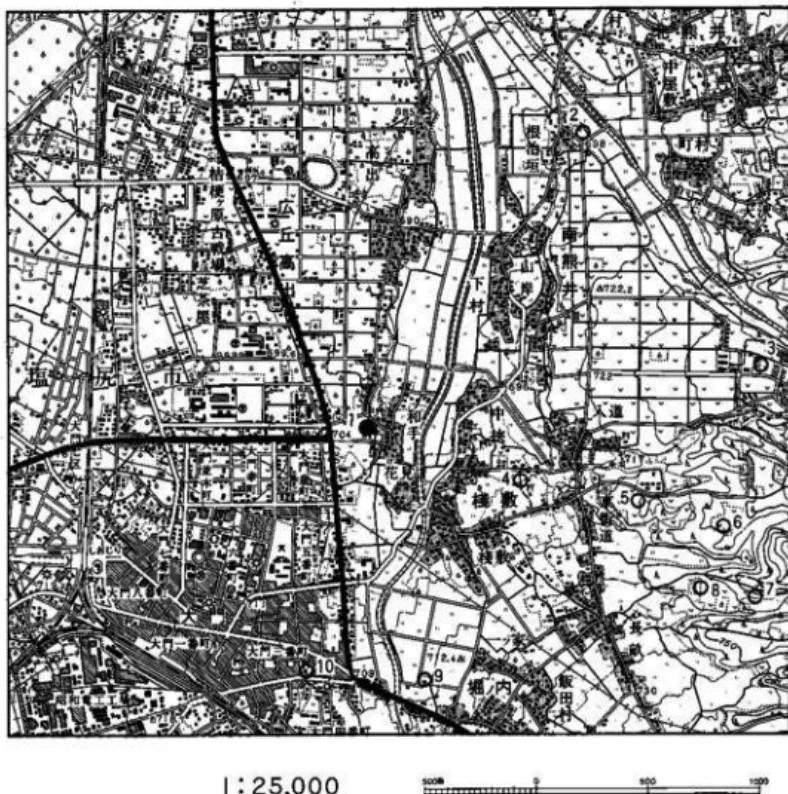
第2節 周辺遺跡

塩尻市大字広丘高出地籍から大字広丘野村地籍にかけて、松本市へ向かって北流する「田川」の左岸段丘上には市内でも有数の遺跡密集地帯が展開し、「高出遺跡群」と呼称されている。今回調査された和手遺跡は、この最南端に位置している。田川の流れを不可欠の条件として存立してきたこれら遺跡群を中心に、以下概観してみたい。

先土器時代 市内では最もまとまった資料が得られている。他では田川上流の塩尻峠山腹を中心とした地城を掲げることができる。高出遺跡群最北端の丘中学校では、ナイフ形石器、尖頭器、搔器、石刃、蔽石、彫器、礫器が出土し、黒崖で尖頭器、北ノ原でナイフ形石器、尖頭器、有舌尖頭器、搔器、石刃、一夜窪で尖頭器、有舌尖頭器、今回の和手で尖頭器がそれぞれ出土している。狭範な調査内での出土であり、高出遺跡群の特性を示す時期として、今後の調査研究が最も

期待される部分かと思われる。

縄文時代 高出遺跡群から東に臨まれる筑摩山地東山山麓には、田川に向かって流下する群小河川により形成された幾筋もの舌状台地が発達している。これら台地上には、147軒の中期環状集落が確認された祖原をはじめとする多くの遺跡が展開し、県内でも有数の該期遺跡密集地帯となっている。これに比して、平野部となる田川流域における遺跡数は極めて僅少となり、高出遺跡群中では、黒崖で早期山形押型文土器、一夜窪で早期、前期、中期の土器がそれぞれ僅かに得られているにすぎない。該期生活圏が山麓部を中心に展開したことが如実に示している。



1. 和手 2. 上木戸 3. 山ノ神 4. 中挟 5. 向阳台
6. 北原 7. 堂の前 8. 福沢 9. 中島 10. 柴宮

第1図 和手遺跡位置図

弥生時代　近年、該期初頭の資料が市内でも多く蓄積されてきたが、いまだ痕跡的であり、むしろ後期に入って田川流域を中心とした遺跡数の激増が確認されている。高出遺跡群だけでも、丘中学校では110点のガラス玉と鉄劍を埋蔵した方形周溝墓1基が発見され、北ノ原で住居址4軒と土器、石鎌、石包丁、磨製石斧、和手で3軒の住居址と方形周溝墓3基、土器、磨製石鎌、石包丁が得られているほか、黒崖、一夜窪、北海渡、上村、裏の原、社宮寺で土器、石器類が出土している。このほか、和手の南約1kmの柴宮で銅鏡が出土し、和手の田川対岸に位置する中挾で住居址3軒と方形周溝墓4基、やや上流の田川端、砂田でも住居址の確認があり、田川流域に根をおろした該期文化解明のための貴重な資料を提供している。

古墳・奈良時代　この時期になると、市内全体をみても確認された遺跡数はわずかなものとなっている。高出遺跡群中では、和手で8世紀を中心とした21軒の住居址が調査されているほかは遺物の採集もほとんどなされていない。田川右岸では、中挾で古墳時代の住居址6軒が確認されている。

平安時代　市内全域の平野部から山麓部にかけての広範囲に集落が展開する時期に入る。丘中学校では26軒、上村で3軒、和手で10軒の住居址が調査され、遺物はこのほかに、黒崖、一夜窪、北海渡、古屋敷、分教場西、裏の原、社宮寺、五郎治郎で確認されている。和手対岸の中挾では38軒の住居址が調査され、田川のやや下流にあたる吉田川西で271軒、吉田向井で94軒の住居址がそれぞれ調査されている。田川流域を中心に伸張した該期里棲み大集落の様相が徐々に明らかになりつつあるといえよう。

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

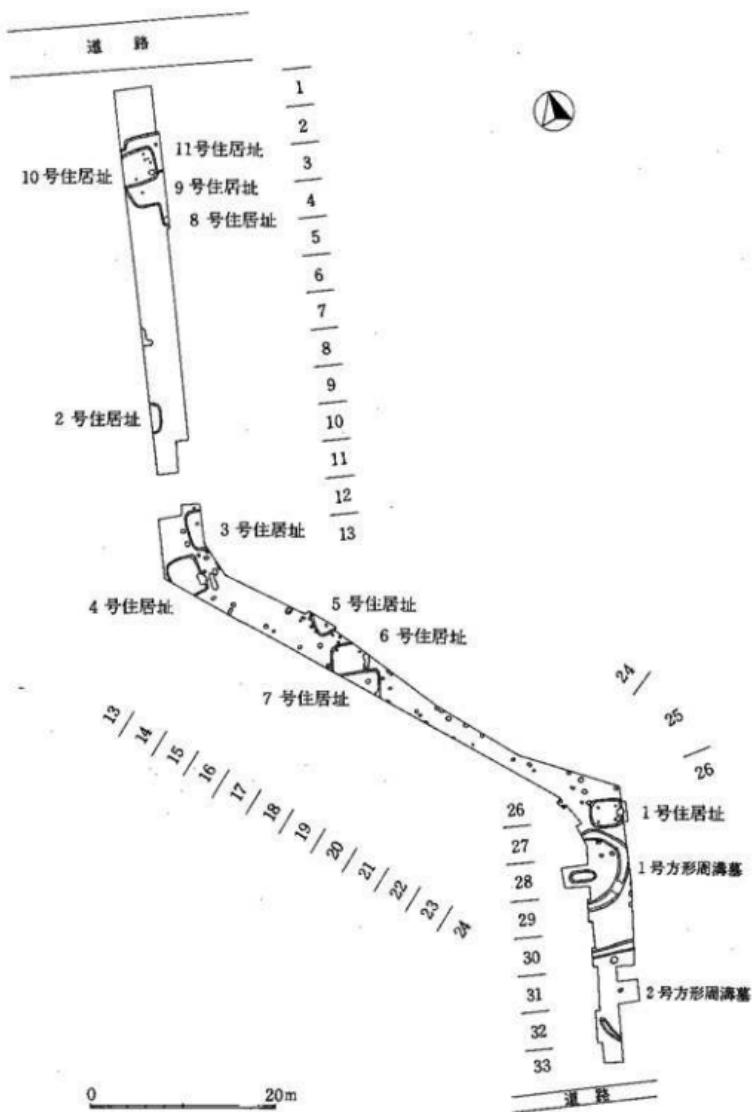
今回発掘調査の対象となった和手遺跡は、塩尻市大字広丘高出地区の最東南端部に位置する。市の東南部、諏訪地方との境をなす塩尻峠から流下する「田川」が、松本市へ向かって北進を始める地点にあたり、遺跡は、この田川の左岸段丘上に立地している。田川が北流するこの地域では、左岸において約3kmにわたる河岸段丘の形成がみられ、和手遺跡附近を起点に、末端の丘中学校附近で比高差約5mを計っている。田川と、この西方約3kmを北流する「奈良井川」との間は、「桔梗ヶ原」と呼ばれる平野部で、和手遺跡の立地する田川左岸段丘はこの東縁部にあたっている。田川左岸段丘上は、広丘高出地区から広丘野村地区におよぶ広範な地域で、通称「高出遺跡群」と呼ばれる先土器時代から平安時代にかけての遺跡密集地帯となっている。

今回の報告による調査は、市道新設改良工事に伴い実施されたが、時期を同じくして、国道20



第2図 調査地区図

1:2,500



第3図 和手遺跡全体図

号（塩尻バイパス）改築工事に伴う発掘調査も行なわれ、両者で遺跡の性格を解明するための資料を多く得ることができた。市道部分では、弥生時代の住居址3軒と方形周溝墓2基、平安時代の住居址8軒が確認された。市道幅での調査のため、全様を明らかにした遺構は僅少であったが、この地域が、広範な遺跡の中で弥生時代と平安時代の2時期に集落域となっていたことが判明した。バイパス関連の調査では、古墳時代末から奈良時代をへて平安時代に至る住居址24軒と建物址3軒、方形周溝墓1基、溝址2、小堅穴11基などが検出された。遺跡全体としては、弥生時代から平安時代の長期にわたり、ほとんど間断なく集落の営みが存続していたと言えよう。また、遺構外遺物として先土器時代の尖頭器1点と、縄文時代早期の楕円押型文土器2片が得られ、該期の遺跡の1つとしても捉えることができた。

第2節 発掘区の設定

和手遺跡は、国道19号線と20号線が南、西、北方向に分岐する高出交差点の東側畠地帯に在り、遺跡の東側を「田川」が流れている。道路用地は、国道と田川のほぼ中間、両者から約150mの所を南北ランク状に設定された。標高700mの平地で、西側には「桔梗ヶ原」の平地が続き、国道との比高差約1m、東側は、田川に向かって緩やかな傾斜となり、田川との比高差約6~7mを計っている。

発掘調査に先立つ試掘調査によれば、調査区北側では深さ20~30cmで褐色のロームが確認され、中央部から南側にかけては順次ローム上の堆積が深くなり、中央部で30~35cm、南側で35~50cmを計った。ローム上は大きく2層に分かれ、上層が茶褐色の耕作土で、下層が暗褐色の遺物包有層となっている。3層とも、礫はほとんど含まない。

調査は、バックフォーによる表土除去を行なった後、グリッド設定をした。グリッドは、調査区に沿って4m間隔の杭を打ち、北から南へ向かって1~33グリッドとした。

発掘調査総面積は、470m²である。

第IV章 遺構・遺物

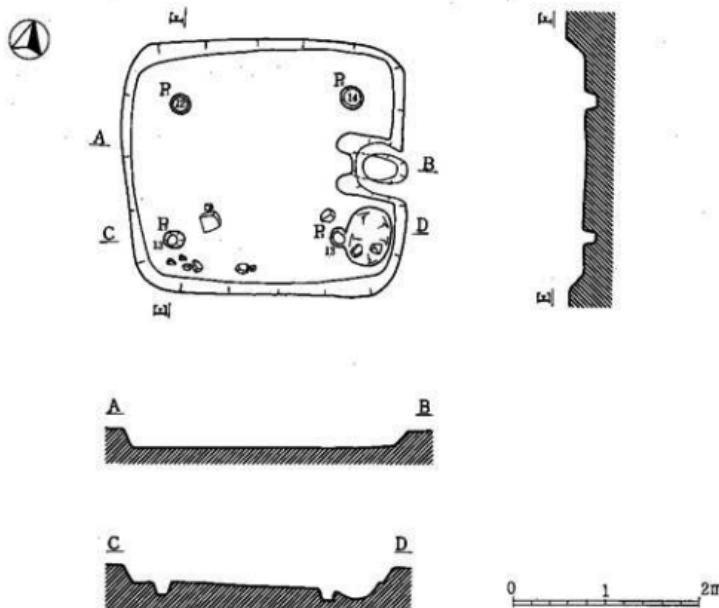
第1節 住居址

第1号住居址

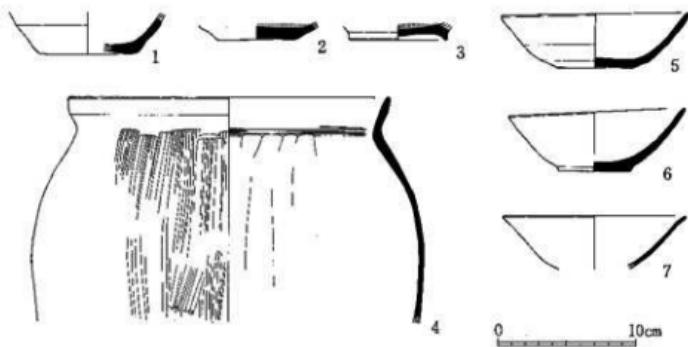
遺構 本址は調査区東側の26、27グリッドに検出され、ここはちょうど道路用地が屈折する箇所にあたる。検出された住居址群の中では最も南側に位置し、2基の方形周溝墓の北隣りにある。重機による表土除去の際、ローム面に明瞭な暗褐色土の小形方形プランが確認され、第1号住居址とした。

プランは主軸方向がN·75°Eを指す隅丸方形を呈し、規模は東西300cm、南北273cmを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、凹凸の少ない良好な面を残す。壁高は各辺とも均一であり、20cm前後を測る。

底面は概してよく踏み固められており堅緻であるが、壁際に張りやや軟弱となり、カマド周辺



第4図 第1号住居址



第5図 第1号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器種	寸法(cm)		色調	成形・調整の特徴	備考
			内径	底径			
1	土師	壺	6.8		明褐色	ロクロナデ 回転糸切り 内面ミガキ	-
2	+	+	5.8		黒褐色	*	内面黒色処理
3	+	+	6.6		暗褐色	*	-
4	+	壺	22.6		茶灰	口縁部横ナデ 脚部外表面ハケメ 口縁部内面カキメ	-
5	須恵	壺	13.21	5.6	4.0	暗褐色 明褐色	ロクロナデ 回転糸切り 黒面あり 完成品
6	+	+	12.4	5.0	4.6	灰白	*
7	+	+	13.0		茶灰	*	*

が最も著しい。西壁から中央域がやや高く、カマド方向に若干の傾斜を有しているが、全体的には平坦域となっている。底面上のビットは5基あり、そのうちP₁～P₄が4本柱の主柱穴にあたる。深さは12～14 cmとやや浅い。南東隅のカマド脇には深さ17 cmの椎鉢状を呈するビットがあり、中には厚さ10 cmを測る焼土の堆積がみられた。貯蔵穴の可能性が強い。

カマドは東壁中央に構築されており、間口22 cm、奥行60 cmを測る粘土カマドである。極めて遺存状態が良好で、袖部、煙道部とともに完全な形で検出された。カマドに伴う焼土、灰等はほとんどみられなかった。

本住居址は小形ながら形態、壁、カマド、柱穴などが極めて整っており、20号バイパス関連で発掘された住居址も含め、和手遺跡から検出された住居址の中では最も遺存状態がよかった。

土器 本址より土師器の壺、甕、須恵器の壺が検出された。土師器の壺の内面はミガキが施されており(2)、(3)は黒色処理されている。甕(4)は脚部外表面は弱いハケメ、口縁部内面はカキメ、脚部内面はヘラナデによって整形されている。須恵器の壺は3点検出され、(5)、(6)は完形で出土した。いずれも黒斑が認められる。

本址の所属時期は、出土遺物の様相より和手皿期に相当する。

第2号住居址

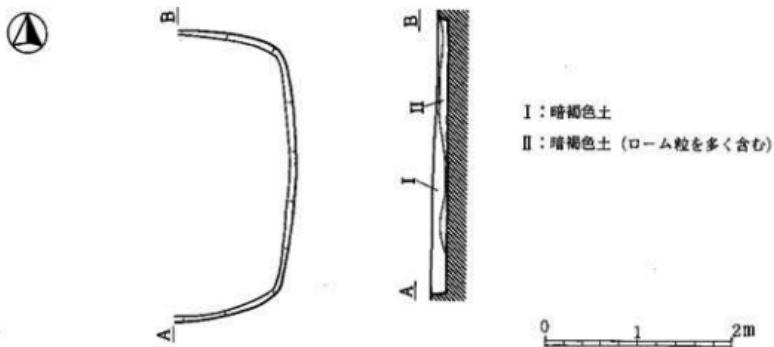
遺構 本址は調査区北側の9、10グリッドに位置し、南隣りには第3号住居址が存在する。付近は遺構検出面が搅乱により荒れており、加えて住居址の大部分が調査区外にあったため、プランの確認が遅れ、当初は小堅穴かと思われたが、床面を追って柔かい覆土を取り除いていったところ壁を確認することができた。

プランは半分以上が調査区外のため明確ではないが、検出された壁から推察して隅丸方形の平面形態を呈すると思われる。N-SもしくはE-W方向に長軸をもち、規模は南北303cmとやや小形である。

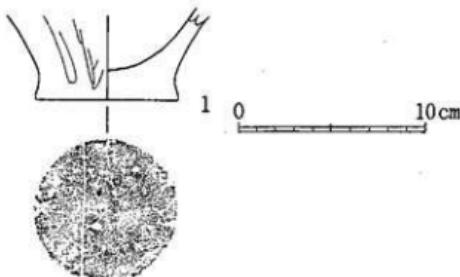
壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅く、東壁14cm、南壁20cm、北壁11cmを測るにすぎない。よく締っており堅緻であるが、搅乱が著しいため明瞭さに欠ける。

床面はよく踏み固められており、水平平坦な面を残している。床面上にピット・周溝などの施設はみられなかった。また炉、焼土等も確認することはできなかった。

土器 本址の出土遺物は大変少なく壺の底部が1点検出されたのみである。底径7.8cmを計



第6図 第2号住居址



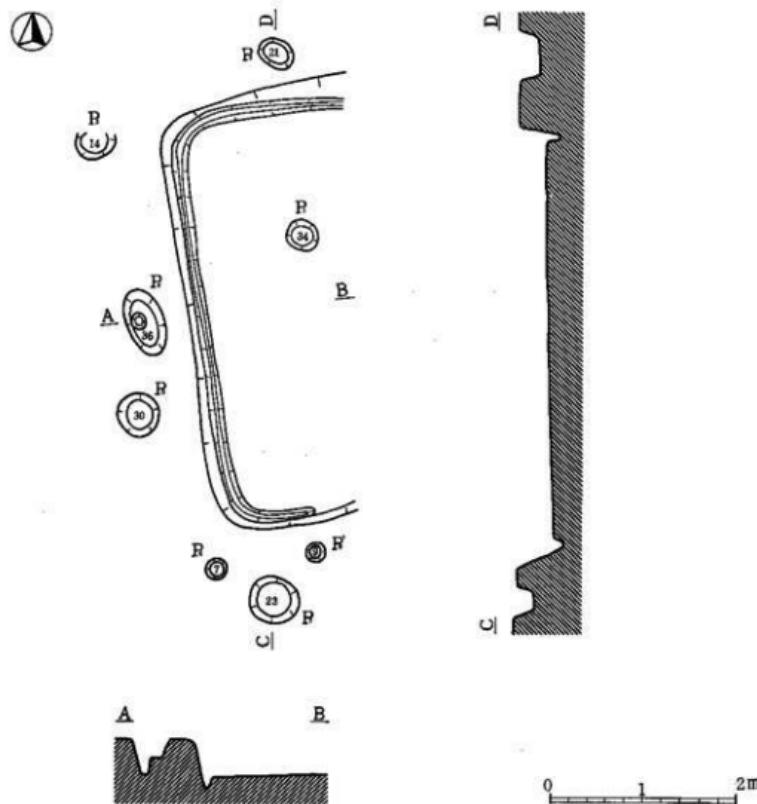
第7図 第2号住居址出土土器

る。外面はヘラミガキ、内面はナデによって調整されている。また、底部には木葉压痕が認められる。焼成は良好で胎土には長石、石英、雲母を含む。

第3号住居址

遺構 本址は調査区中央の12、13グリッドに位置し、北側には第2号住居址が、南側には第4号住居址が存在する。調査区東壁沿いに検出され、東半部は調査区外にかかったため、西半部のみの確認にとどまった。

住居址の全容が検出できなかったためプランは容易には把握できないが、残存壁の在り方より推して隅丸方形の平面形態を呈すると推察され、主軸方向はN-15°Wを指す。規模は南北で453



第8図 第3号住居址

cmを測る。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、壁高は西壁21 cm、南壁 29 cm、北壁40 cmと北壁が最も高いが、これは住居址床面の北傾斜によるものである。

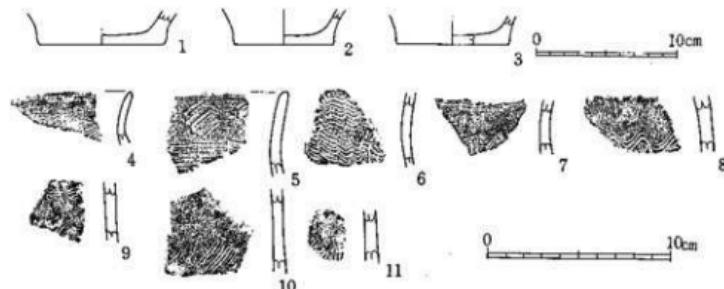
底面はよく踏み固められており、堅緻である。平坦ではあるが、北向きの傾斜が著しく、北壁下と南壁下では比高差12 cmの差が出ている。ピットは底面上に1基(P_1)が認められるが、位置的に柱穴とは考え難く、本址の柱穴はむしろ屋外に認められる多数のピットの中に存在すると思われる。周溝は幅12~15 cm、深さ8 cmとかなり深いものであるが、南壁下で途切れている。

本址では炉、焼土などの痕跡は認められず、調査区外に存在する可能性が強い。

土器 本址の出土遺物として甕があげられるが全形をうかがえるものは検出されなかった。1~3は底部で、いずれもナデ調整されている。4~11は縁部から胴部にかけての拓影である。波状文、斜行短線文、簾状文の施文が認められる。

第4号住居址

遺構 調査区中央の13、14グリッドに位置し、ちょうど道路用地が屈折する箇所に発見された。付近はローム面が荒らされ、かなり起伏に富んでいたため、検出の段階でなかなかプランを把握することができなかった。住居址の南西部は調査区外へかかっていたため、全容を確認することはできなかった。本址の北隣には第3号住居址が存在する。



第9図 第3号住居址出土土器

土器観察表

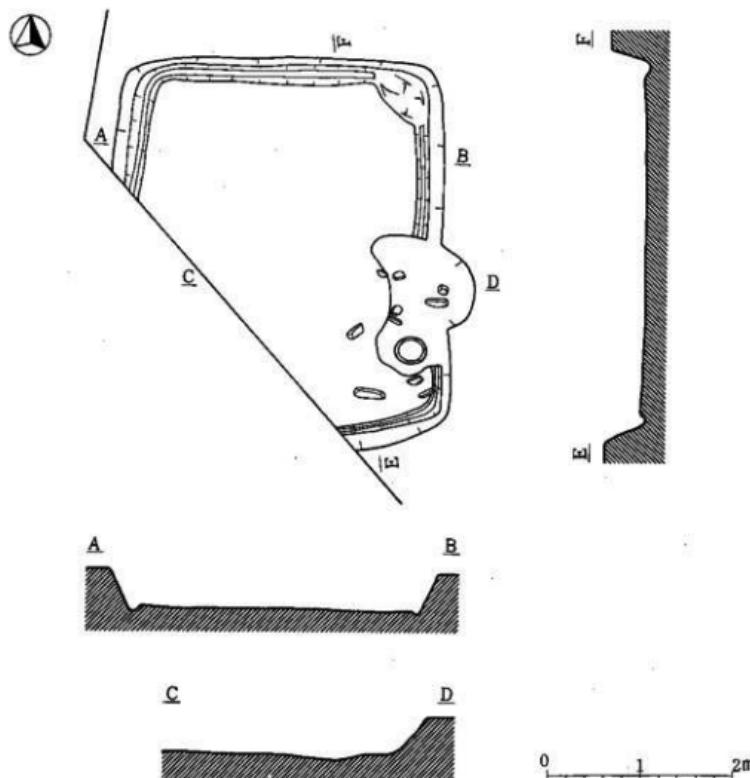
番号	器種	部位	文様構成要素	胎土	内面調整	参考
1	甕	底		石英 長石	ナデ	
2	+	+		*	*	
3	+	+			*	
4	口縁		波状文	長石	*	
5	+		斜行短線文 瀬状文	石英	*	外面に炭化物付着
6	甕		波状文		*	
7	+	+	*	長石	*	
8	刷		*	*	*	
9	+	+	*	*	*	
10	+	+	斜行短線文	石英 長石	*	
11	+	+	*	*	*	

プランは隅丸方形の平面形態を呈し、N-S の主軸方向を指す。規模は南北413 cm、東西355 cm を測る。

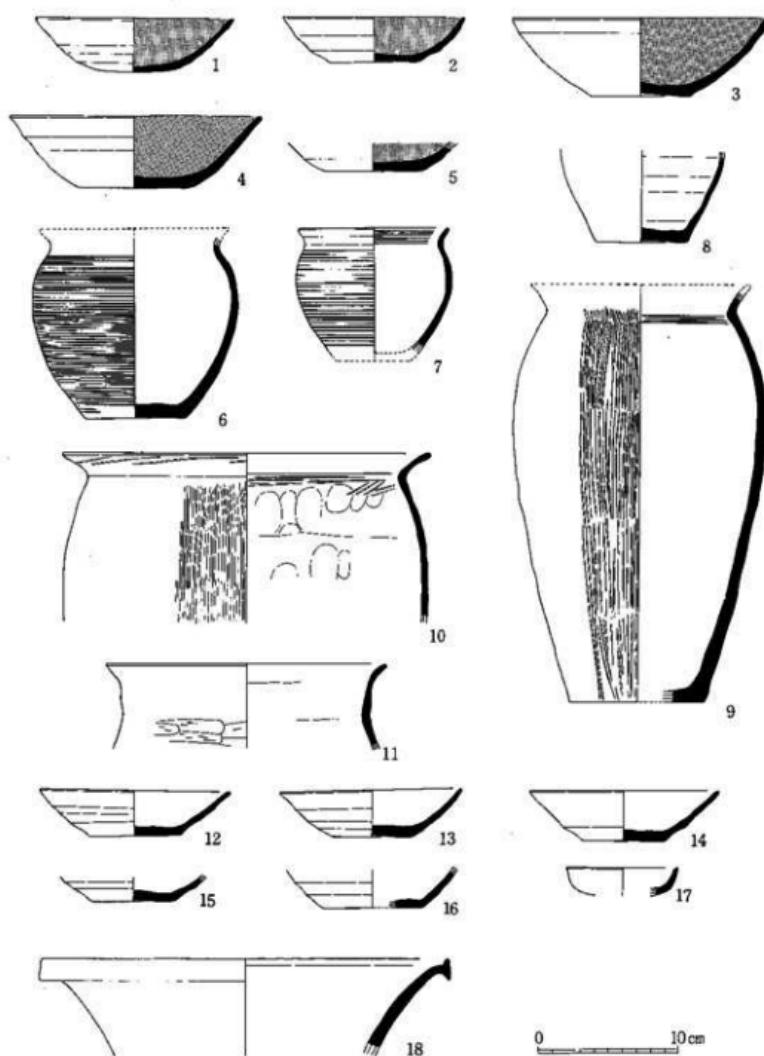
壁はほぼ垂直に振り込まれており、調査区内では最も深い。壁高は東壁34 cm、西壁41 cm、南壁44 cm、北壁43 cm を測る。

床面はよく踏み固められた堅緻な面を残しており、水平平坦である。床面上にピットはみられず、柱穴を確認することはできなかった。周溝は検出された床面に限れば全周しており、幅10~24 cm、深さ5 cm とかなりしっかりしたものである。

カマドは東壁南寄りに壁をやや掘り込んで構築している。カマド下の床面上には数個の礫が散在しており、石組粘土カマドの崩壊を表わしている。間口60 cm、奥行き88 cm とかなり大型のものであるが、焼土は確認されなかった。



第10図 第4号住居址



第11図 第4号住居址出土土器

土器觀察表

番号	種別	器種	寸法(cm)		色調	成形・調整の特徴	備考	
			口径	底径				
1	土師	杯	14.0	6.0	3.9	茶褐色	無	ロクロナデ 回転糸切り 内面黑色処理
2	+	+	12.7	6.4	3.4	暗褐色	+	タタキメ
3	+	+	18.0	7.0	5.6	+	黒褐色	タタキメ 完成品
4	+	+	17.8	7.3	5.2	+	+	タタキメ
5	+	+	—	—	6.6	+	+	タタキメ
6	+	小型甕	—	—	7.2	茶褐色 暗褐色	+	胴部外面カキメ
7	+	+	—	—	10.6	+	+	口縁部内面カキメ
8	+	+	—	—	6.4	茶褐色	+	摩耗大変激しい
9	+	甕	—	—	9.6	+	+	外面ハケメ 口縁部内面カキメ
10	+	—	—	—	26.0	暗褐色 暗褐色	+	内面指圧痕
11	+	—	—	—	20.0	赤褐色 赤褐色	+	武藏甕
12	須恵	杯	12.5	6.6	3.5	灰白 灰白	ロクロナデ 回転糸切り	完成品
13	+	+	12.0	5.6	3.4	+	+	タタキメ
14	+	+	13.4	5.8	3.6	+	タタキメ	タタキメ
15	+	+	—	—	5.8	+	+	タタキメ
16	+	+	—	—	7.0	+	+	タタキメ
17	+	?	—	—	8.0	暗灰 暗灰	+	タタキメ
18	+	甕	—	—	29.0	灰白 口縁部ロクロ痕	+	外面に自然釉

土器 本址の出土遺物は大変多く、土師器の杯、小型甕、甕、須恵器の杯、甕が検出され、図示できるものだけで18点を数える。土師器の杯は小型なもの(1、2)と大型なもの(3、4、5)の2形態が存在する。内面はいずれも黒色処理されている。小型甕は3点検出された。(6)、(7)は胴部外面に回転を用いたカキメをもち、(8)も摩耗が大変激しく確認できないが、同様の形態を示す。甕(9)は口縁部を欠くが器高は約30cmを計る。胴部外面はハケメ調整されており、口縁部内面には回転を用いたカキメが認められる。(10)は武藏甕である。胴部外面の整形はヘラケズリによる。須恵器の甕(12)は口縁部のみ図示できたが胴部の破片も出土している。口縁部にはロクロ痕、胴部外面にはタタキメが確認できる。

本址の所属時期は、出土遺物の様相より和手皿期に相当する。

第5号住居址

造構 調査区中央の15、16グリッドに位置し、北半部が調査区外にかかったため、南半部のみの検出となった。当初のトレンチでは南側のコーナーが僅かに検出されるにとどまり、住居址が深いところから掘り下げも容易ではなかった。そこで北壁を道路幅クイギヤリまで後退させ、やや拡張を行なった。

確認された箇所が住居址の1コーナーであったため、プランの全容は把めないが、残存壁の在り方より推して隅丸方形の平面形態を有するものと思われる。

壁はほぼ垂直に掘り込まれ、よく締っており堅紙である。壁高は西壁38cm、南壁44cmを測る。床面はよく踏み固められており、多少凹凸が存在するが、全体的には水平である。周溝は検出された中では連続しており、幅10~20cm、深さ6cmを測る。ピットは床面上に1基検出され、位置や深さから主柱穴の可能性が強いが、屋外に検出されたピットも壁外柱穴とみてよいだろう。

カマド、焼土等は確認されなかった。

土器 本址の出土遺物は大変少なく土師器の小型甕が1点図示できたのみである。口径は12.8

cm を計る。口縁部は横ナデされており、胸部外面にはススの付着がみられる。

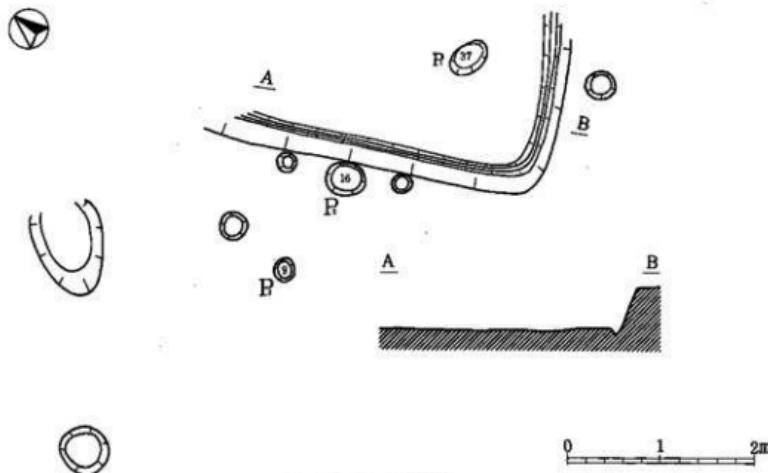
第6号住居址

遺構 本址は調査区中央の18、19グリッドに位置し、ちょうど北側と南側をトレンチ幅によつて欠けた状態で検出された。本址の南東側には第7号住居址が重複しており、後者が本址を漸っている。また北西側には第5号住居址が隣接している。本址と7号住との漸り合いで最後まではつきりせず、住居址の認定が遅れたが、両カマドの存在が明らかになった時点で住居址とした。

プラン 南東壁が7号住との重複になっているため全容を明らかにすることはできないが、隅丸方形の平面形態をもち、長軸方向で400cmの規模を測る。なお長軸方向は7号住と同じでN-45°Eである。

壁はほぼ垂直に掘り込まれており、よく締っている。壁高は西壁36cm、南壁45cm、北壁35cmと比較的深い。南壁がとりわけ深いのは床面が傾斜しているというよりむしろ検出面の高さに違いがあることに起因し、最高で10cmの比高差を有する。

床面はよく踏み固められており全体的に水平をなす。ピットは床面上に数基認められるが、いずれも主柱穴とは断定できないものであった。周溝は西壁沿いに認められ、おそらく全局するも



第12図 第5号住居址



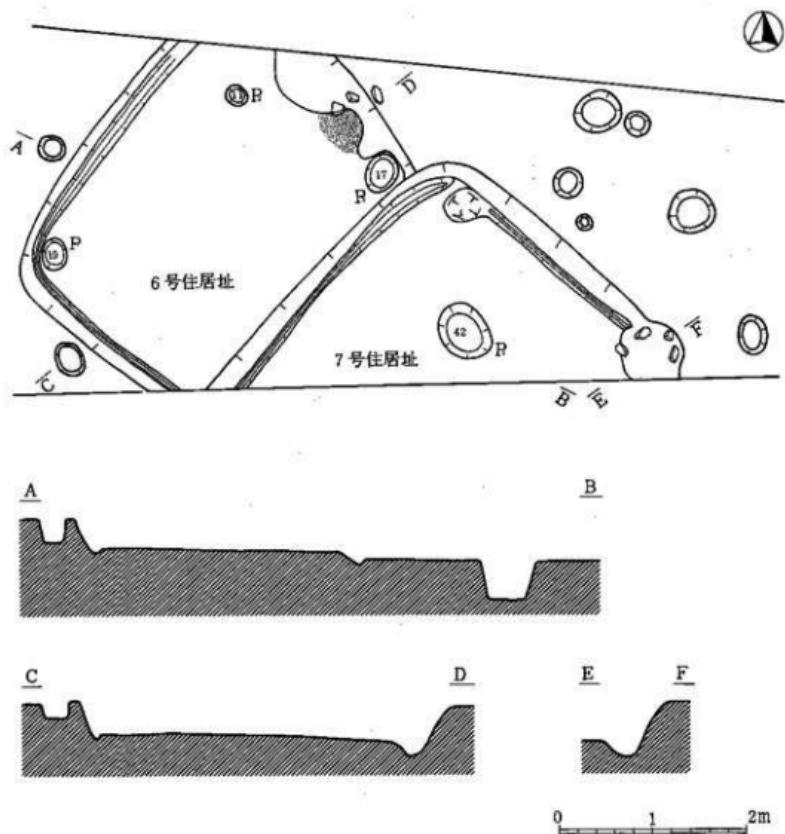
第13図 第5号住居址出土土器

のと思われる。幅10~18 cm、深さ3~4 cmとやや小型のものである。

カマドは住居址北東壁のほぼ中央に構築されており、すでに崩壊が著しいが石組み粘土カマドである。間口50 cm、奥行60 cmで焚口はやや窪んでおり、焼土の堆積が若干あった。

土器 本址より土師器の杯、須恵器の蓋、坏、壺が検出された。土師器の坏は、内面はいざれもミガキが施されており、(4)以外は黒色処理されている。須恵器の蓋は2点検出され、ロクロ成形後、天井部は回転ヘラケズリされている。壺(8)は頸部であるが胴部の破片も出土している。ロクロ痕が認められ、外面には暗緑色の自然釉がみられる。

本址の所属時期は、出土遺物の様相より和手III期に相当する。



第14図 第6、7号住居址

第7号住居址

遺構 本址は調査区中央の18、19グリッドに位置し、前項の第6号住居址の一部を掘り込んで重複している。両者の床面の比高差は11cmあり、掘り下げの段階で容易に識別はついた。しかし覆土が同一でしかも境界付近が軟弱であったため、第6号住居址の貼床の可能性も考え新旧関係の判別がなかなかつかず、結局、貼床の有無を確認できないままに本址を新とした。

住居址の一部が検出されただけであったためプランの全容を把握することはできないが、検出された壁より推察して隅丸方形の平面形態を有するものと思われる。主軸方向は第6号住居址とほぼ同様、N-45°Eである。

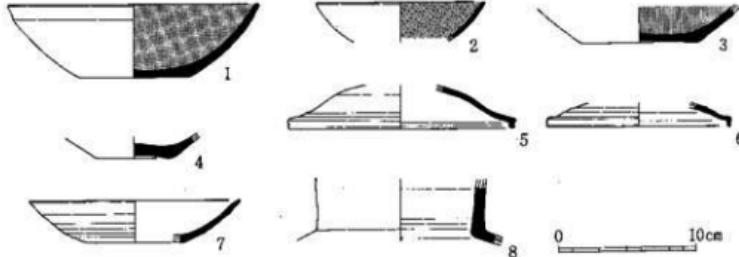
壁はほぼ垂直に掘り込まれており、締って堅緻である。壁高は唯一検出面から掘り込まれている北壁が51cmと深く、第6号住居址床面を掘り込む西側が11cmを測る。

床面は水平、平坦で、よく踏み固められ堅緻である。中央付近にピットがみられるが、かなり大型のものであり、柱穴か貯蔵穴か判断に至らなかった。周溝は幅があまりなく、また深さも3cmと浅いものであるが、かなり均一に造られており、おそらく全局するものであろう。

カマドは北東壁南寄りに壁を僅かに掘り込んで構築された石組み粘土カマドである。調査区の壁沿いにからうじて検出され、また崩壊もかなり進んでいるところから存在のみ把握されたにすぎないが、若干の焼土の堆積はみられた。

土器 本址より土師器の甕、須恵器の杯が検出された。甕(1)はハケメ調整されている。杯はいずれもロクロ痕、回転糸の痕が認められる。

本址の所属期は、出土遺物の様相より和手III期に相当する。



第15図 第6号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器種	寸法(cm)				色調	成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外曲面			
1	土師	甕	17.8	7.8	5.2	暗赤	黒	ロクロナデ 回転糸切り 内面黒色処理	完形品
2	*	*	12.0	*	*	*	*	*	*
3	*	*	8.2	*	明褐色	*	*	回転糸切り	*
4	*	*	5.4	*	茶褐色	*	*	内面ミガキ	
5	須恵	甕	16.0	*	暗灰 喧灰	*	*	天井部回転ヘラケズリ	
6	*	*	13.0	*	*	*	*		
7	*	甕	15.0	6.6	3.0	灰白	灰白	*	
8	*	甕	*	*	*	暗赤	*		外面に自然釉

第8号住居址

遺構 調査区の北側に位置し、3、4グリッドに存在する。折りしもここには4住居址が重複しており、しかも明瞭な漸り合いをしていないため、覆土の暗褐色土中では各住居プランを追うことが極めて難しく、そのため各住居址の確認が最も遅くなってしまった。第8号住居址は4軒の最も南端にあり、当初は調査区東壁沿いに僅かな落ち込みをみせるだけであった。そこで東壁を道路幅ぎりぎりまで拡張し掘り下げた。第9号住居址とは床面同レベルで重複しているが、9号住は出土遺物から弥生時代に比定されるため、ちょうど境内に存在する礫群および焼土は本址のカマドが崩壊したものと断定された。また第10号住居址および第11号住居址は本址を掘り込みで漸っているため、3者の中では本址が最も古いものであることがわかった。

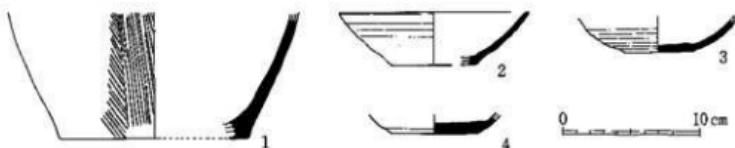
遺構の一部だけが検出されたため住居址のプランは把握できないが、遺存する南西壁から推察して隅丸方形プランを有するものと思われる。

壁は南壁と西壁の一部が検出されたが、共に軟弱でしっかりしていない。壁高は南壁で20cm、西壁で22cmを測る。

床面は耕作等によりかなり荒れており、凹凸が著しい。南西隅に擂鉢状のビットがみられるが、これは住居址に付隨するというよりむしろ後世の掘り込みによるものと思われる。床面上には数個の礫が散在しており、西壁沿いにあったと考えられるカマドの礫がかなりの範囲で崩壊していることを示している。またこれらの礫に混じてかなりの量の焼土も散逸していた。

土器 本址より土器の杯、甕、瓶が検出された。杯は高台をもつもの（1、2、3）と、無高台のもの（4～8）の2形態が存在する。内外面ともロクロ痕が認められ、底部は回転糸切りによる。甕（9）は底部を欠く以外はほぼ完形で出土した。内外面とも丁寧なヘラナデによって調整されており、口縁部内面にはハケメ調整痕も認められる。瓶（10）は輪づみ成形後、ナデ調整されている。内外面とも輪づみ痕が顕著で、凹凸が激しい。胴部外面にはスヌの付着が認められる。

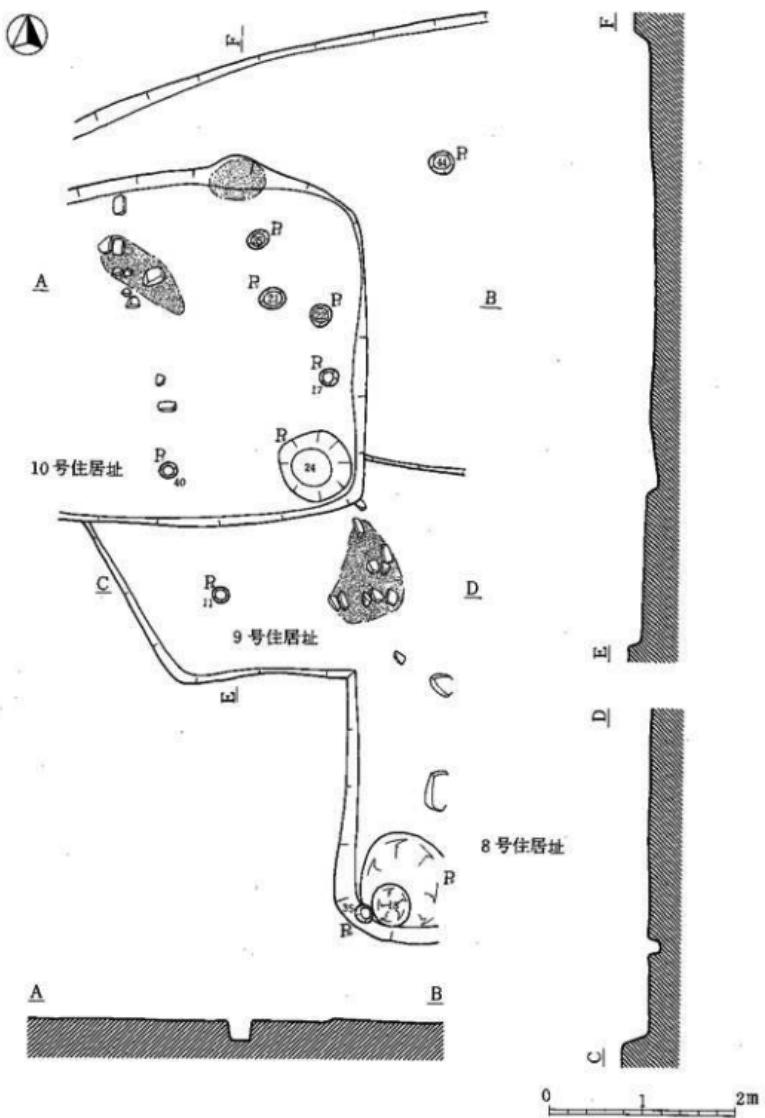
本址の所属時期は、出土遺物の様相より和手IV期に相当する。



第16図 第7号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器種	寸法(cm)			色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外面	内面		
1	土器	甕	13.6	9.7	13.6	暗褐	茶褐	ロクロ痕	
2	土器	甕	13.4	6.0	5.7	暗灰	暗灰	ロクロナデ	
3	*	*	5.0	—	—	灰白	灰白	*	回転糸切り
4	*	*	6.0	—	—	*	*	*	*



第17圖 第8、9、10、11号住居址

第9号住居址

遺構 本址は調査区北側の3、4グリッドに位置し、第8号住居址および第10号住居址と重複している。8号住とは床面が同レベルであるが、壁が明確にくい違うため別住居と容易に区別され、僅少ではあるが出土遺物から4軒では唯一の弥生時代に比定された。南壁および西壁の一部が遺存しているのみで、最も保存状態の悪い住居址であった。

プランはやや不整な隅丸方形を呈し、N-60°EかN-30°Wの方向を指す。

壁はほぼ垂直に掘り込まれているが浅く、南壁で4cm、西壁で9cmを測るにすぎない。また北側で掘り込まれている10号址の床面とは9cmの比高差を有している。

床面はよく踏み込まれている堅敏な平坦面で、同レベルでも8号住の床面とはやや性質を異にしている。床面からは炉、周溝等の施設が何も確認されなかった。

土器 本址より甕、壺が検出され、これらは弥生時代後期、中島式に比定される。

1は、床面上よりつぶれた状態で出土した甕である。ほぼ完形を呈し、口径18.6cm、器高26.7cmを計る。頸部には二段の波状文が施文されており、その下に斜行短線文が断続的に器面を一周している。そして、その下、すなわち胴部上半には条線が施されている。口唇部には細かな刻みが施されている。外面の口縁下から胴部にかけて黒色炭化物の付着が認められる。

2は、甕の胴部上半である。頸部には斜行短線文の文様帯と波状文が交互に、二段に施文されており、波状文は右回りに施文されている。焼成は大変良く、内面はヘラミガキされている。

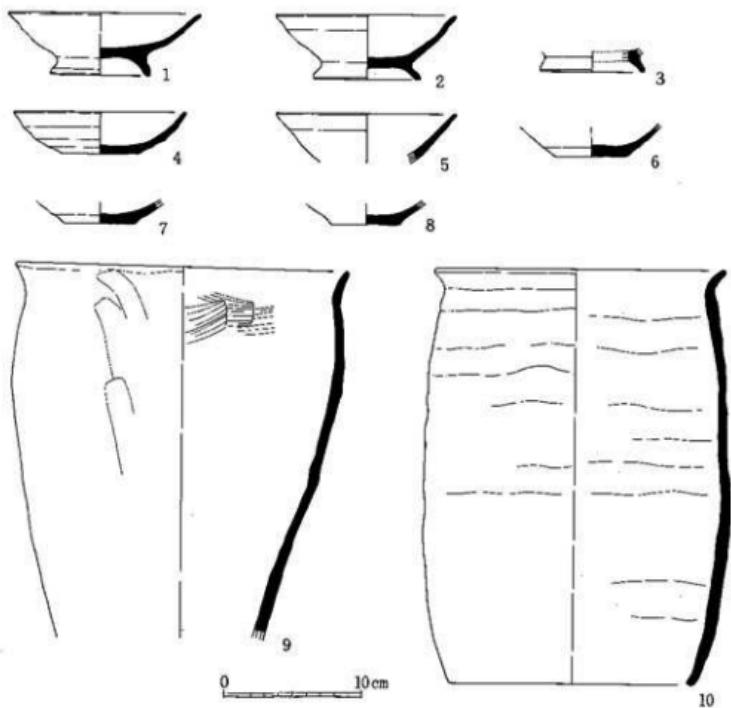
3、4は壺で、3は口縁部、4は胴部である。3は口縁部が立ち上がる形態を示し、短線文の施文が認められる。4は小型の壺で、胴部の最大径は11.0cmを計る。外面はヘラナデによって調整されており、内面にはヘラケズリ痕が認められる。

5、6、7は底部であり、5はやや大型で底部10.4cmを計る。7は甕、もしくは壺の底部で、内面はハケメ調整されている。底部はわずかに上げ底になっている。

8~13は同一個体の甕である。口縁部はやや立ち上がる形態を示す。口唇部に細かな刻みが施されており、口縁部先端は一列に斜行短線文が施文されている。頸部には簾状文が施文されており、胴部上半は斜行短線文が何列にもわたって施文されている。焼成は大変良く、胎土には裏母を多く含む。

14~22は斜行短線文が施文されている甕の口縁部から胴部の拓影である。18は簾状文、21は条線、22は波状文も認められる。

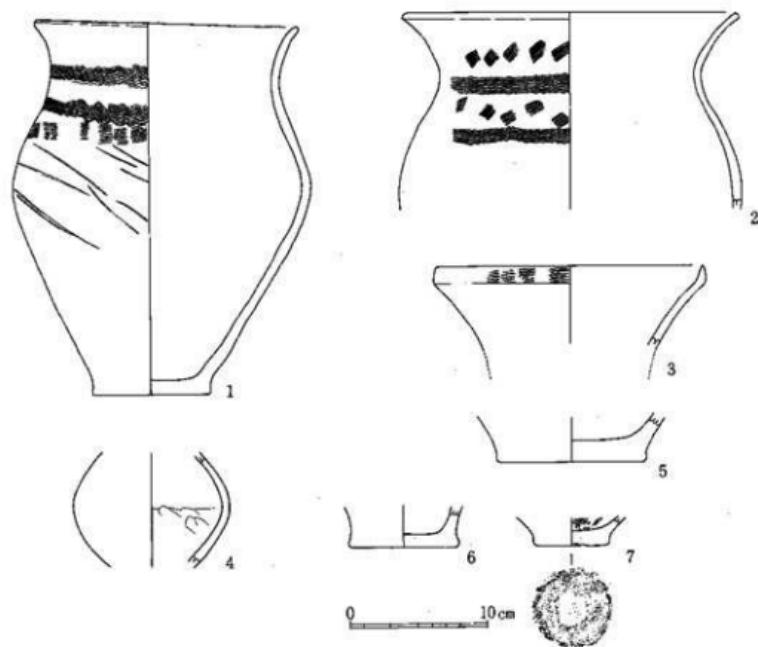
23~26は、波状文が施文されている甕の拓影である。23は口唇部にも波状文の施文が認められる。



第18図 第8号住居址出土土器

土器觀察表

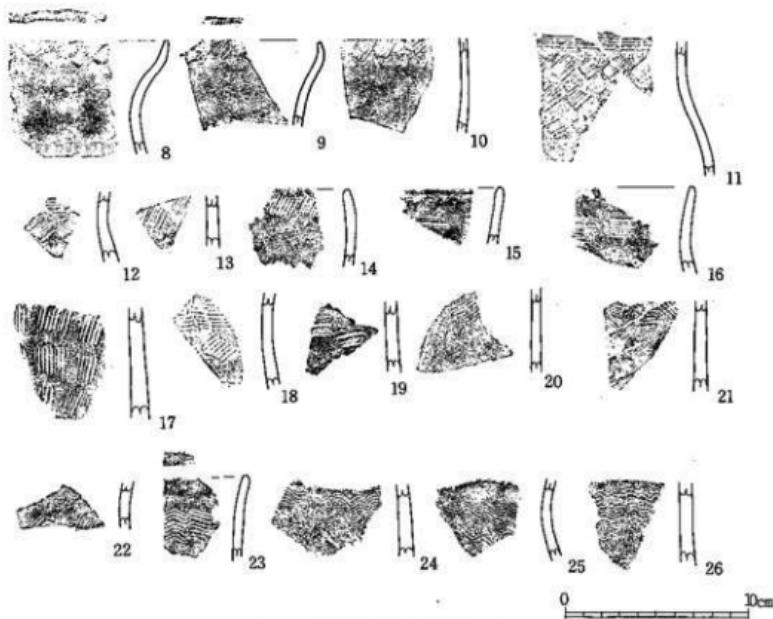
番号	種別	看種	寸法(cm)			色調	成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	器高			
1	土鍋	环	13.6	7.0	4.5	明褐色	明褐色	ロクロナデ 回転糸切り
2	*	*	12.7	7.4	4.6	暗茶褐色	暗茶褐色	*
3	*	*		7.2		明褐色	明褐色	*
4	*	*	12.0	5.4	3.0	♦	♦	内面にスス付着
5	*	*	12.8			茶褐色	茶褐色	*
6	*	*		5.2		明褐色	明褐色	*
7	*	*		5.0		♦	♦	*
8	*	*		4.8		茶褐色	茶褐色	内面にスス付着
9	*	甕	23.7			暗褐色	ヘラナデ 口縁部内面ハケ調整	外面にスス付着
10	*	甕	20.6	17.4	29.5	暗褐色	口縁部横ナデ 外面底部付近ヘラケズリ(?)	



第19図 第9号住居址出土土器(1)

土器観察表

番号	器種	寸法(cm)		文様構成要素	胎土	内面調整	備考
		口径	底径				
1	壺	18.6	8.4	26.7 波状文 斜行短縞文 条縞		ナデ	口脣部に刻み 脣部外面に炭化物
2	・	23.6		・	長石	ミガキ	
3	壺	18.0		短縞文	鷺母	ナデ	
4	・				長石 小石	ナデ ケズリ	
5	壺	10.4			#	ナデ	内面摩耗激しい
6	・	7.6			#	・	
7	*(?)	5.2			#	ハケメ調査	



第20図 第9号住居址出土土器(2)

土器観察表

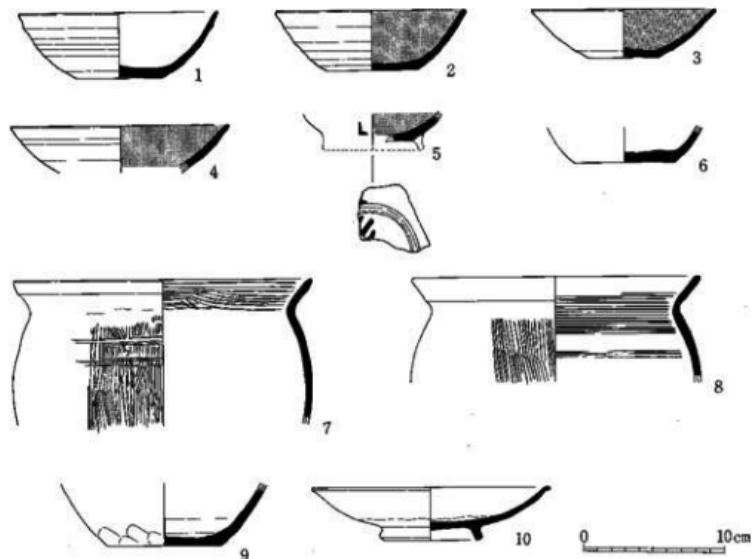
番号	器種	部位	文様構成要素	胎土	内面調整	備考
8	鑿	口縁	斜行細線文・葉状文	雲母	ナデ	口縫部に刻み 8と同一個体
9	・	・	・	・	・	・
10	・	腹	・	・	・	・
11	・	頭一肩	葉状文	・	・	・
12	・	・	・	・	・	・
13	・	頭	・	・	・	・
14	・	口縁	・	・	・	・
15	・	・	・	・	・	・
16	・	・	・	・	・	・
17	・	肩	・	雲母 石英	・	外面上に炭化物
18	・	頭	葉状文	砂粒	ハケ調整	・
19	・	肩	・	石英 長石	ナデ	・
20	・	・	・	砂粒	・	内面摩耗激しい
21	・	・	条紋	長石	・	・
22	・	頭	波状文 (口縫部にも)	・	・	・
23	・	口縁	・	ミガキ	・	・
24	・	頭	・	長石	ナデ	・
25	・	肩	・	・	・	・
26	・	肩	・	・	・	・

第10号住居址

遺構 本址は調査区北側の2、3グリッドに位置し、第9号住居址および第11号住居址と重複している。前者を掘り込み漸っているが、後者については貼り床で被われている。平面図では貼り床を剝いた状態で示されている。

プラン は隅丸方形の平面形態を有し、主軸方向はN-Sを指す。規模は南北で282 cmを測るにすぎず、おそらく調査区では最も小形に属するものと思われる。

壁は検出された各辺とも検出面からの掘り込みではなく、隣接住居址床面からの掘り込みしか遺存されていない。このため正確な壁高を確認することはできないが、現存高では東壁3 cm、南



第21図 第10号住居址出土土器

土器観察表

番号	種別	器種	寸法(cm)		色調		成形・調整の特徴	備考
			口径	底径	高さ	外面		
1	土師	环	14.0	6.4	4.7	暗褐	暗褐	ロクロナデ 回転糸切り 内面ミガキ
2	*	*	13.6	6.4	4.3	茶褐	黑	* * 内面黒色処理
3	*	*	13.0	5.0	3.5	*	*	*
4	*	*	15.4			明褐	*	*
5	*	*				*	*	
6	*	小型甌	7.2			茶褐	内面ロクロ痕	
7	*	甌	21.0			茶褐	*	ロクロ横ナデ 刃部外面ハケメ 口縁部内面カキメ
8	*	*	20.6			暗茶褐	*	*
9	*	*	8.0			明褐	底部および底部付近ヘラケズリ	内面ロクロ痕
10	灰輪	甌	17.0	6.6	3.8	灰白	灰白	ロクロナデ

壁9 cm、北壁12 cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれており良好な面を残している。

床面はよく踏み固められており堅緻である。ピットは床面上に計6基検出されたが、いずれも主柱穴と断定できないものであった。床面北西部に多量の焼土と礫群が確認され、カマドの崩壊を物語っている。位置的にはそらく第11号住居址のカマドと推察される。

カマドは北壁中央に壁をやや掘り込んで構築された粘土カマドである。袖部を失ってはいるが多量の焼土の堆積がみられた。

土器 本址より土師器の壺、小型甕、甕、灰釉の皿が検出された。壺はいずれも内面にはミガキが施されており、(1)以外は黒色処理されている。(5)は墨書きが体部外面と底部に認められるが判読はできない。小型甕(6)は底部のみであるが、胴部外面には回転を用いたカキメをもつであろう。甕(7)、(8)は胴部外面にハケメ、口縁部内面にはカキメが認められる。甕(9)は内部にロクロ痕が認められ、外部底部付近はヘラケズリによって整形されている。灰釉陶器としては皿(10)が1点検出されたのみである。

本址の所属時期は、出土遺物の様相より和手III期に相当する。

第11号住居址

遺構 調査区北側の2、3グリッドに位置し、第8号住居址および第10号住居址と重複している。共に出土遺物から平安時代に比定されるが、本址は前者を漸り、また後者に対しては貼り床で被っている。床面がかなり荒れており、また南壁が検出できなかったため、プランが最後まで把握できず、結局、調査区の中では住居址の確認が最も遅くなかった。

住居址の東側および西側の壁が検出されなかっただため、プランは把握できないが、残存する北壁と南壁から測定される規模は南北477 mを測り、これは今回、検出された住居址の中では最大級である。

壁は北壁が検出面からの掘り込みで壁高17 cmを測るが、南壁は8号住居址からの掘り込みが残存しているのみで壁高は12 cmを測るにすぎない。南壁はかなり軟弱で検出にも労を費した。

床面はよく踏み固められ堅緻であるが、凹凸が著しく南側へ傾斜している。また10号住との重複部分には貼り床が施されており、一部残存していた。重複部分も含め床面上には数基のピットがみられるが、いずれも主柱穴と認められるものではなかった。

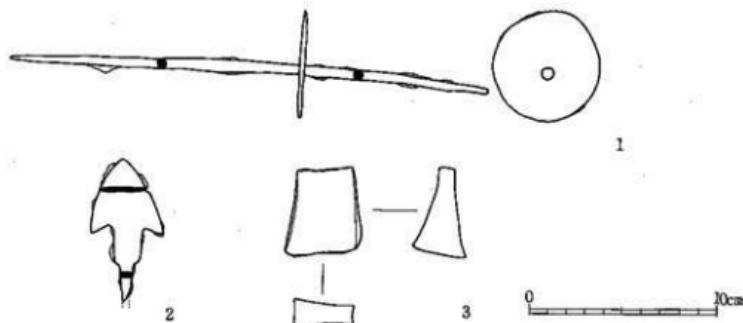
カマドは明確ではないが、10号住北西隅に散在する礫群と焼土が該当すると思われる。

土器 本址の出土遺物は大変少なく須恵器の壺が1点図示できたのみである。口径11.8 cm、底径7.0 cmを計る。底部および外面底部付近に回転ヘラケズリ痕が認められる。



第22図 第11号住居址出土土器

鉄器・石器 当遺跡より少量ではあるが鉄器、石器が出土した。紡錘車(1)は第4号住居址よりほぼ完形で出土した。重さ67g、15.5cm、円板部の直径5.8cmを計る。鉄鎌(2)は第3号住居址の履土中より検出された。混入品とおもわれる。茎の先端部を欠く以外はほぼ完形である。重さ20gを計る。砥石(3)は第6号住居址より検出された。先端部以外はいずれの面も使用痕が認められ、5面の使用面をもつ。中粒砂岩製で重さ57gを計る。



第23図 鉄器、石器

第2表 住居址一覧表

住居	グリッド	規 模	平面形	主軸方向	壁 高	戸・カマド	位 置	床面	周囲	切合し関係	時期
1	26, 27	300×273	隅丸方形	N-75°-E	20, 20, 20, 20	粘土カマド	東壁中央		ナシ		平安前
2	9, 10	303×—	(隅丸方形)	—	14, —, 20, 11	—	—		ナシ		弥生後
3	12, 13	453×—	(隅丸方形)	N-15°-W	—, 21, 29, 40	—	—	西、北			×
4	13, 14	415×355	隅丸方形	N-S	34, 41, 44, 43	石組粘土カマド	東壁南寄	(全周)			平安前
5	16, 17	—×—	(隅丸方形)	—	—, 38, 44, —	—	—	(一部アリ)			×
6	17, 18	400×—	(隅丸方形)	N-45°-E	—, 36, 45, 25	石組粘土カマド	北東壁中央	(全周)	→7H		×
7	18, 19	—×—	(隅丸方形)	N-45°-E	—, 09, —, 51	石組粘土カマド	北東壁南寄	(全周)	→6H		×
8	3, 4	—×—	(隅丸方形)	—	—, 26, 22, —	石組粘土カマド	西壁北寄		ナシ	→9H→10H, 11H	×
9	3, 4	—×—	—	—	—, 29, 14, —	—	—		ナシ	→8H, 10H	弥生後
10	2, 3	282×—	隅丸方形	N-S	3, —, 9, 12	粘土カマド	北壁中央		ナシ	←8H, 9H→11H	平安前
11	2, 3	477×—	—	—	—, —, —, 16	石組粘土カマド	西壁中央	貼り床	ナシ	8H, 9H, 10H→	×

第2節 方形周溝墓

第1号方形周溝墓

調査区の南側は立木の根株や耕作等により地層が攪乱しており、遺構検出面にあたるローム面もかなり荒れている。助農による遺構検出作業の段階においてローム面に多くの暗褐色土の落ち込みがみられたが、そのほとんどは上記のような攪乱に起因するものであった。しかしそれらの中の数ヶ所は溝状にえらぶことができ、調査区内から弥生時代に比定される住居址も確認されているところから方形周溝墓の可能性も考えられた。トレント発掘により全容を追うことができないため道路幅ぎりぎりまで拡張し、検出を行なったところ、方形周溝墓2基分の溝を確認することができ、北側からそれぞれ1号、2号とした。

第1号方形周溝墓は第1号住居址の南隣りに接しており、拡張により東側半分が検出された。また主体部の一部もトレント内に検出されたため、隣接地の地権者の御好意により主体部の部分だけ拡張し全容を露呈することができた。

検出された溝から推察すると平面形は各辺がやや外側に張り丸みをおびた隅丸方形を呈しており、南北8.8mの規模を有する。方向はN-25°-Eを示している。溝に囲まれた内側区域は平坦で、封土は確認できなかった。

北溝は幅40~84cmで、検出面からの深さは28cmである。断面タライ状を呈し、底面はほぼ平坦である。東溝は幅84~106cmで、検出面からの深さは18~13cmを測る。掘り込みはほぼ垂直で底面は平坦である。断面を切った箇所にある窪みは後世の掘り込みと考えられる。南溝は僅かに検出されたのみであるが、幅72cm、深さは7~15cmと他より若干浅く、掘り込みもやや掘鉢状を呈する。

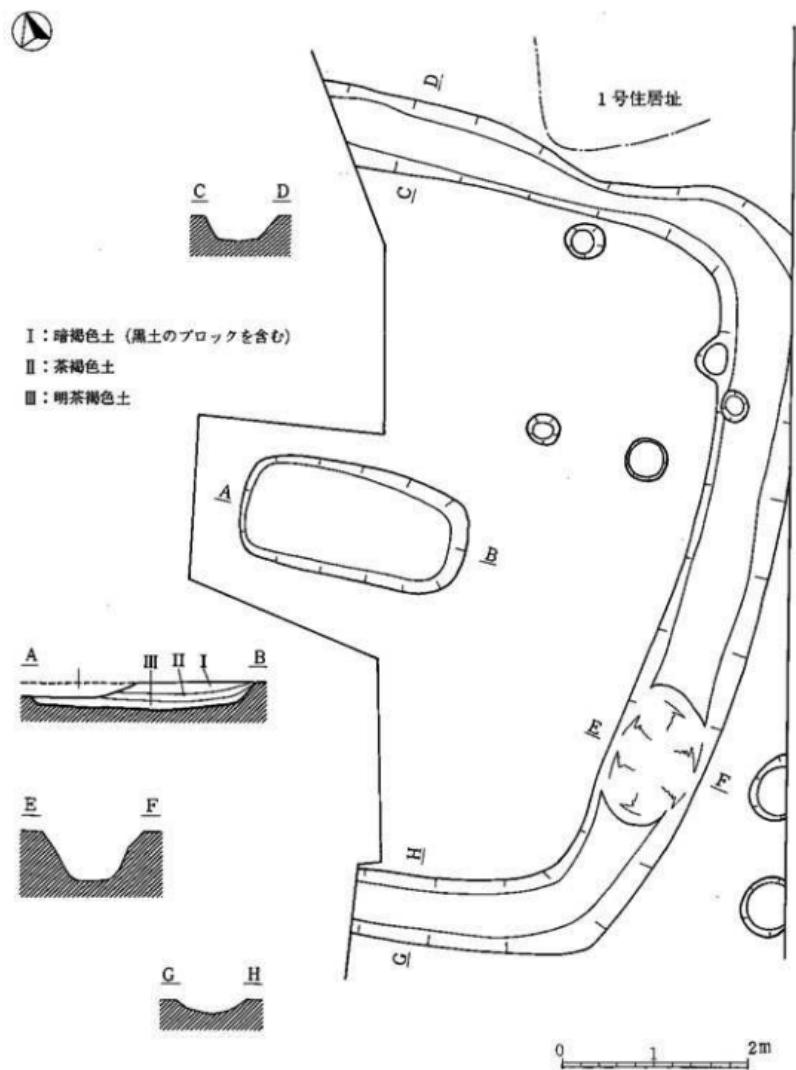
主体部は東溝から2.20m内側に1基検出された。主軸方向はN-57°-Wを指し、周溝とはやや方向を異にしている。土塗は長軸242cm、短軸120cmの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは31cmを測る。覆土は3層に細分され整然と堆積しているが、西半部は攪乱が入り、現在の炭が堆積している。底面は平坦で非常に堅緻である。

出土遺物は若干あったが、該期にあたるものではなく流れ込みと思われる。

第2号方形周溝墓

調査区の最南端に位置し、北側には第1号方形周溝墓が存在する。溝の検出が断片的であるため全容がえにくく、加えて主体部が発見されなかつたため、不明確な部分が多い。

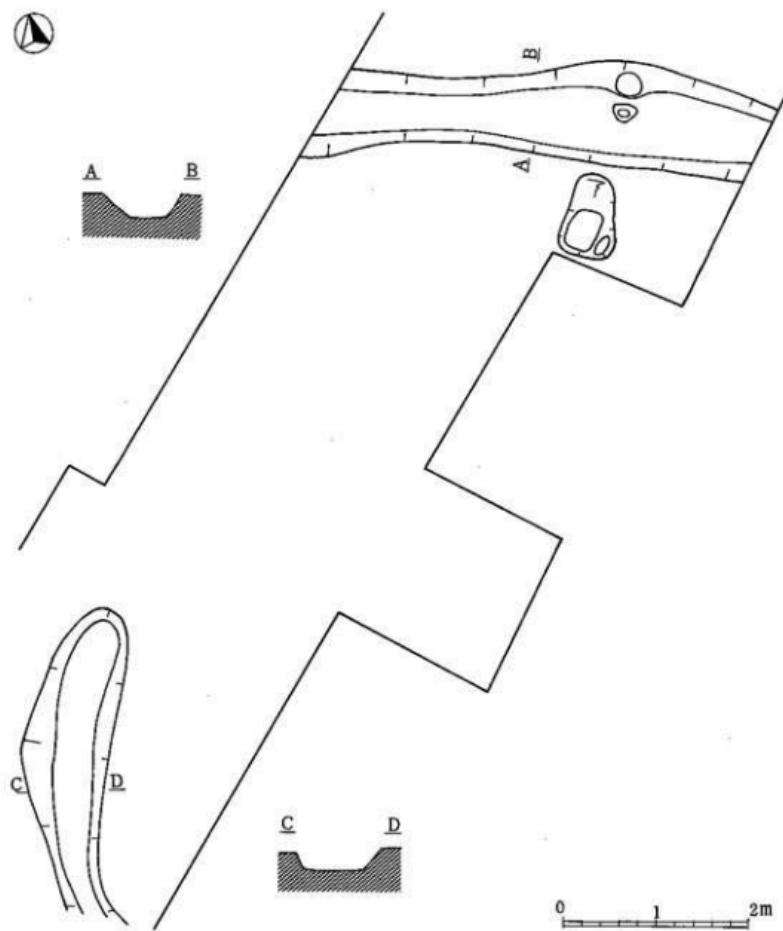
検出された溝から推察される規模は1号より遙かに大きく、方向もN-18°-Eとやや異なる。西侧中央に陸橋部を配し、幅は2.6m前後と考えられる。溝に囲まれた内側区域は平坦で、封土はやはり確認できなかった。



第24図 第1号方形周溝墓

周溝は北溝と西溝の一部が検出されている。北溝は幅68~114 cmで、検出面からの深さは10 cmである。掘り込みは傾斜を示し、底面はほぼ平坦である。西溝は陸橋部より南側が検出され、幅48~94 cm、検出面からの深さは23cmを測る。掘り込み面は軟弱で、断面もやや搾鉢状を呈する。

本遺構に伴う出土遺物はなかった。



第25図 第2号方形周溝墓

第3節 ピット・遺構外出土遺物

ピット内出土土器

壺1は、第5号住居址の南側に位置するP₂より出土した。口縁部と底部を欠く。頭部には簾状文、胴部上半には2段に波状文が施されている。波状文の施文はやや粗雑である。最大胴径は21.0 cmを計る。胴部外面にはスヌの付着が認められる。外面ともナデ調整されており、胎土には砂粒、長石を含む。弥生時代後期・中島式に比定される。

高杯2は、P₂の南約1mに位置するP₃より出土した。底径9.0cmを計る。外面および杯部内面は赤く塗ってあり、ヘラミガキが施されている。杯部と脚部の境に一段の凸帯を有し、特異な形態を示す。類似の出土例は僅少である。胎土には長石、雲母を含む。

遺構外出土弥生土器

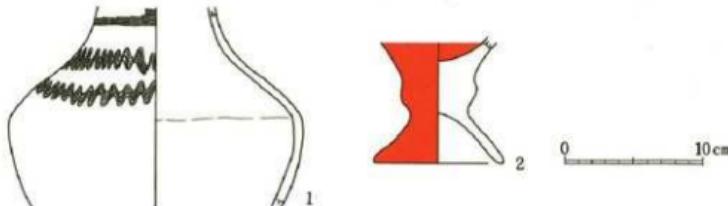
今回の調査で少量ではあるが遺構外より弥生時代に属する土器が出土した。

1~11は第4号住居址の覆土中より検出された。いずれも甕の破片である。3は両面に施文が認められる。外面は口唇部先端に沈線が施文されており、内面には波状文が施文されている。4は口唇部に刺突が施されている。6、7、8はいずれも波状文の下に斜行短線文が施文されている。

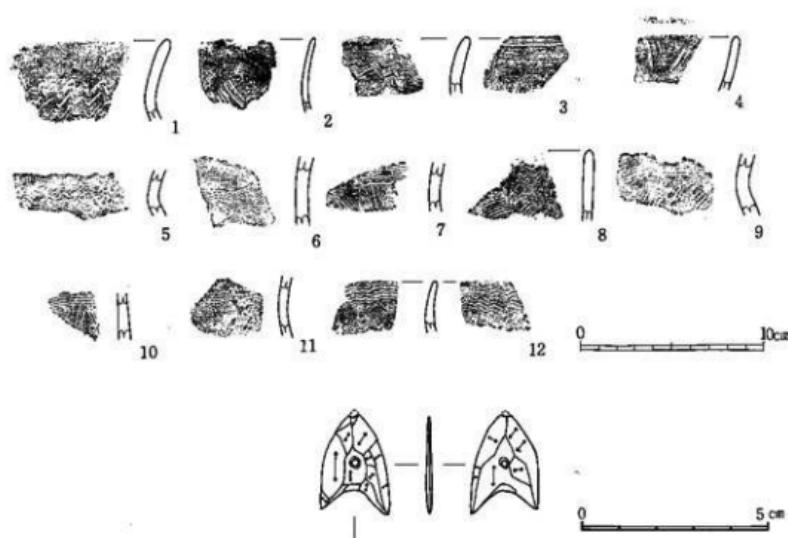
12は第6号住居址の覆土中より出土した。外面とも波状文が施文されている。

遺構外出土弥生石器

弥生時代に属する石器として磨製石鎌が1点、第6号住居址の覆土中より出土した。先端部を一部欠き、長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ1.5mmを計る。中央には一孔の貫通孔が両側から穿たれている。石材はホルンヘルスで、全体に研磨が施されている。



第26図 ピット内出土土器



第27図 遺構外出土弥生土器、石器

土器観察表

番号	器種	部位	文様構成要素	胎土	内面調整	備考
1	甕	口縁	波状文	長石	ナデ	第4号住居址出土
2	*	*	斜行短縦文	小石	*	*
3	*	*	沈線、内面波状文	雲母	*	*
4	*	*	斜行短縦文(?) 口唇部刺突		*	*
5	甕	底	波状文	長石 雲母	*	*
6	*	*	*	小石	*	*
7	*	*	*	石英	*	*
8	*	口縁	*	*	*	*
9	甕	底	波状文	*	*	*
10	*	*	直線文	*	*	*
11	*	*	波状文	*	*	*
12	*	口縁	(内外面)	雲母	*	*

第V章 まとめ

和手遺跡は、塩尻市広丘高出の田川左岸段丘上に展開する高出遺跡群に属し、その南端付近に位置する。田川からは150m 西方であり、瓦塔の出土した大門汐留からは500m 北にあたる場所にあり、こうした自然的、歴史的環境は本遺跡の性格を考えるうえで重要な要素となろう。

和手遺跡の調査は、今回の市道新設改良工事に伴う事前調査に併行して塩尻バイパス建設用地内での発掘調査も実施され、東西100m、南北150m にわたる範囲の様相が明らかにされた。遺跡の北半にあたると推定される市道新設用地内では、弥生時代後期住居址3、方形周溝墓2、平安時代住居址8が検出され、南半地域と考えられるバイパス用地内では、方形周溝墓1、古墳～奈良時代住居址13、平安時代初頭8、平安時代中期2、建物址3、溝址1などが検出された。

こうした遺構の検出状況から遺跡の成り立ちを考えると次のようになろう。

弥生時代後期の住居群は遺跡の北半に集中しており、この住居群の南に隣接して方形周溝墓が位置している。この時期の生産域は、段丘下の田川流域に想定される。市内では近時、弥生時代の集落址の調査が増加しているが、上木戸、向陽台、田川端、中挾そして本遺跡といずれも住居群と方形周溝墓とがセットをなして検出され、田川流域に展開した該当集落の大きな特徴となっている。

古墳～奈良時代にかけては、中心をより南に移す。住居軒数も多く、本遺跡繁栄の最初のピークを示す。古墳・奈良時代の集落は、平出、中挾、久能井、竜神平が知られる程度で類例に乏しく、今回検出された資料は、この時代を考えるうえで貴重なものとなろう。

平安時代初頭になると、再び北側（市道部分）にも住居が構築されだし、居住域は広範囲となる。住居軒数も多く、この時期がこの遺跡の最も栄えた時期といえる。続く平安時代中期にはバイパス、市道分で3軒の住居が確認されたのみで、衰退期といえる。この時代には、東山道が松本国府に向かって田川流域を縦貫していたといわれ、一説には大門瓦塔出土地点付近を通過し、松本市村井付近とされる覚志駅を介し國府に至っていたという。その当否はともかくとして、田川対岸には五日市場の遺跡もあり、当時の重要な地域であったことに間違はない。和手遺跡における平安時代の資料は、当地域の古代文化を考えるうえで不可欠な重要資料となろう。

以上のように、和手遺跡は古墳～平安時代を中心として栄えた集落で、田川流域の古代文化を解明するための基礎となるものと思う。



和手遺跡発掘前全景（北側から）



調査区全景（南側から）

図
版
2



調査区南側（北側から）



調査区北側（南側から）



第1号住居址



第1号住居址カマド



第1号住居址遺物出土状態



第 2 号住居址



第 3 号住居址



第5号住居址



第6、7号住居址



第8、9、10、11号住居址



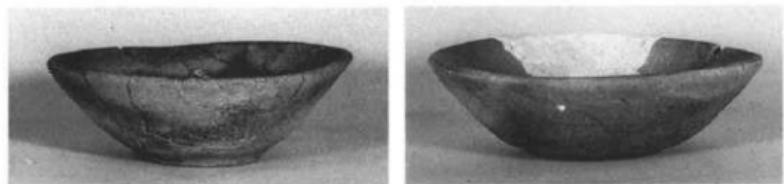
第9号住居址遺物出土状態



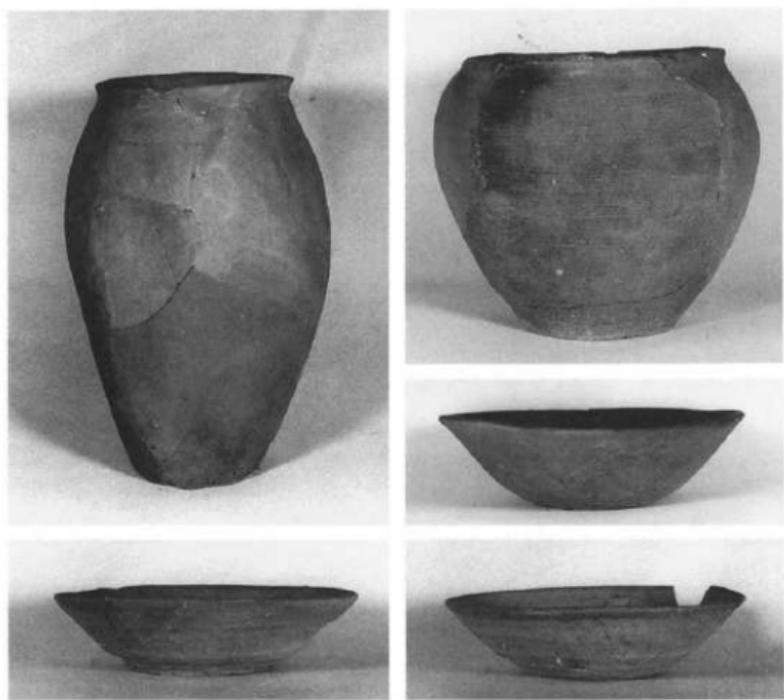
第1号方形周溝墓



第2号方形周溝墓



第1号住居址出土遗物



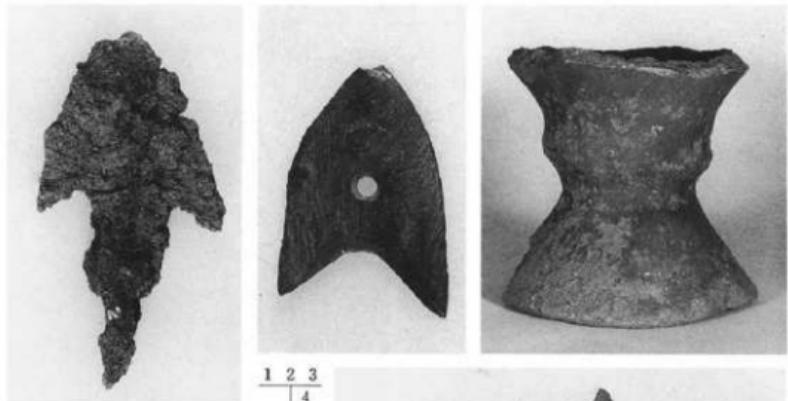
第4号住居址出土遗物



1	2
3	4
5	

1. 第6号住居址出土遺物
2-4. 第8号住居址出土遺物
5. 第9号住居址出土遺物





1 2 3
— | —
4

1. 第3号住居址覆土内出土鐵鏃
2. 第6号住居址覆土内出土磨製石鏃
3. 造構外出土弥生時代高環脚部
4. 造構外出土弥生時代壺



作業風景

和 手 遺 跡

—塩尻市市道和手北線道路新設改良工事
埋蔵文化財包藏地発掘調査報告書—

昭和63年3月22日 印刷

昭和63年3月25日 発行

発行 塩尻市教育委員会
